



ショートコメント

★★★

1980 僕たちの光州事件

2024 年／韓国映画

配給：クロックワークス／99 分

2025（令和 7）年 2 月 21 日鑑賞

オンライン試写

Data 2025-18

監督・脚本：カン・スンヨン

出演：カン・シニル／キム・

ギュリ／ペク・ソンヒ

ヨン／ハン・スヨン／

ソン・ミンジェ

👁️👁️ みどころ

昨年 12 月に尹錫悦（ユン・ソンニョル）大統領が発した「戒厳令」は結果的に“空振り”に終わったが、1979 年 10 月 26 日の朴正熙大統領暗殺事件と、民主化運動が高揚する中のクーデターで権力を掌握した全斗煥将軍（後の大統領）が発した 1980 年 5 月の非常戒厳令は、共に大事件だ。そして、1980 年 5 月 18 日から 10 日間も続いた「光州事件」における戒厳軍 vs 市民軍の激突の結果（悲劇）は『光州 5・18』（07 年）（『シネマ 19』78 頁）で見たとおりだ。

他方、祖父を社長とする一家は、今日、特製のジャージャーメンを売りにした「和平飯店」開店の日を迎えて、客入りは上々！これなら繁盛間違いないのだが、学生たちのデモ行進が拡大すれば・・・？

不幸にもそんな不安が的中！そんな中、和平飯店に集う一家を巻き込んでいく光州市全体の悲惨な運命とは？

権力の前には一市民の命など虫ゲラのようなもの？本作では、そんな絶望的な一家の姿が次々と描かれていくが・・・。

◆日本では 2025 年 2 月 21 日現在、与党たる自公連立政権が衆議院で過半数割れしている中、年度内での予算案通過のためには、国民民主党もしくは日本維新の会の賛成を得なければならないため、両党を天秤にかけながら（？）悪戦苦闘を続けている。他方、トランプ大統領の就任から 1 か月余を経過したアメリカでは、次々と発せられる大統領令と関税を中心とするトランプ大統領の意向が世界中を翻弄している。そして、韓国では、尹錫悦（ユン・ソンニョル）大統領が昨年 12 月 3 日に発令した「戒厳令」に世界中が驚かされたが、それを「内乱罪」だとして彼を弾劾する国会決議の成立にもビックリ。3 月中旬にも決するであろう憲法裁判所での弾劾審理の行方が注目されている。戒厳令が物騒なら、大統領弾劾決議も物騒だ。

◆そんな中、本作が 2025 年 4 月 4 日に公開されることになったが、それは一体なぜ？そもそも、「光州事件」とはナニ？韓国では、光州事件をテーマにした映画が多い。その代表が『光州 5・18』（07 年）（『シネマ 19』78 頁）だが、他にも『KT』（02 年）（『シネマ 2』211 頁）、『ユゴ 大統領有故』（06 年）（『シネマ 16』126 頁）、『タクシー運転手 約束は海を越えて』（17 年）（『シネマ 42』248 頁）、『KCIA 南山の部長たち』（20 年）（『シネマ 48』226 頁）、『ソウルの春』（23 年）（『シネマ 56』176 頁）等がある。

◆第二次世界大戦後に韓国で起きた最大の事件は「朝鮮戦争」（1950～1953 年）。したがって、同作をテーマにした韓国映画が多いのは当然だが、その描き方には北側（北朝鮮）からの視点と南側（韓国）からの視点の 2 種類があり、それぞれに名作が多い。『シュリ』（99 年）（『シネマ 56』183 頁）や『SILMIDO（シルミド）』（03 年）（『シネマ 4』202 頁）が前者の代表作なら、後者の代表作が『JSA』（00 年）（『シネマ 1』62 頁）や『トンマッコールへようこそ』（05 年）（『シネマ 11』141 頁）だ。監督の問題意識や視点によってテーマがあれこれに分かれ、さまざまなストーリーで紡がれていくことになる。

そんな視点で考えると、『国際市場で逢いましょう』（14 年）（『シネマ 36』58 頁）は庶民の感覚から朝鮮戦争の悲劇を描いた韓国映画の典型だが、本作はそれと同じように「光州事件」のど真ん中で生活をしていた、「ごく普通の家族」の姿に焦点を当て、権力が市民の小さな幸福をいかに踏みにじったのか、そして悲劇の中にあっても大切な人を守りたいと願う思いがいかに尊いものであるかを、時にユーモアを交えながら切々と描いたものだ。なるほど、なるほど。韓国人はもともと喜怒哀楽の表現が日本人よりはるかに強いから、“その種の映画” が時として感動的なものを生み出すことが多いが、さて本作は？

◆光州は韓国南西部にある人口約 140 万人の大都市。そんな光州で 1980 年 5 月に起きた光州事件の全貌は、『光州 5・18』をはじめ、前述した映画を観ればよくわかる。日本では、「戒厳令」は気の遠くなるような遠い世界の話だが、昨年 12 月の尹錫悦（ユン・ソンニョル）大統領による戒厳令の発令を見れば、韓国では戒厳令は比較的身近なもの？

そんなことはないはずだが、本作の冒頭は、祖父（カン・シニル）を社長とする「和平飯店」の開店日の風景だ。店内に次々と客が入ってくる風景は幸せいっぱい、前向きなもの。これは平和で民主的な社会であればこそ可能なものだが、光州市民や和平飯店がある町内会の面々、そして祖父を社長とする和平飯店の一家は、それを当然のものと考えていたらしい。ところが、開店日と同じ日に光州市で戒厳令に反対する学生たちの抗議デモが激化し、警官隊と衝突すると・・・？

◆本作は「和平飯店」の開業日に一家揃って撮影した、祖父を中心とする集合写真がすべてを象徴しているので、それに注目！別の仕事に就いている長男のサンウォン（イ・ジョ

ンウ)に代わって店を手伝っているのが次男のサンドウ(ペク・ソンヒョン)と長男の嫁のスジン(キム・ギュリ)だ。そして、三代目社長と目されているのがサンウォンの息子チョルス(ソン・ミンジェ)だが、小学生のチョルスは中華飯店の社長たる地位を引き継ぐのは嫌らしい。

それはともかく、現在妊娠中のスジンや、サンドウの婚約者、さらに、和平飯店のすぐ近くでヨンヒ美容院を営んでいるスジンの友人やその娘でチョルスの幼馴染の女の子ヨンヒたちを含め、これらの面々は1980年5月時点では、幸せいっぱい、希望に満ち溢れていた。しかし、デモの混乱の中で店の中に逃げ込んできたサンウォンが警官隊に発見されてしまったり、警察官に抵抗したサンドウが逮捕されてしまうと・・・。

◆日本では、1960年代後半から70年代前半にかけて、東大の安田講堂事件を頂点とする学生運動が高揚する中、全共闘系学生の逮捕が相次いだ。そして、彼らの裁判をめぐるはいわゆる“荒れた法廷”が大きな社会問題になった。しかし、戦後すぐに、日本国憲法が制定され、新刑事訴訟法が施行された近代民主主義国日本では、少なくとも戦前の「特高警察」による可烈な逮捕、拘留、取調べ(＝拷問)はあり得ないものになった。

ところが1980年5月に発生した光州事件では、戒厳令下であるにもかかわらず反政府的デモに立ち上がった学生たちの一斉検挙に従事する警官たちは、武力行使も許容されていたから、その暴虐ぶりはハチャメチャだ。さらに逮捕した後の取り調べは、尋問とはほど遠い、拷問のオンパレードに！

モロにそれを受けてしまったのが、デモになど全く参加していないのに逮捕されてしまったサンドウだが、釈放された時のサンドウは一体どんな姿に・・・？

◆韓国映画で目立つのは、何と言っても韓国人の気性の激しさだ。それは言葉の面でもそうだが、行動の面でも同じようになることが多い。1980年5月18日午後3時に光州事件が発生し、5月21日には戒厳令による無差別発砲による大流血事件に発展したが、そんな展開の中、和平飯店の開業日に集まった多くの人々の小さな幸せは如何に？

それを描くのが本作の狙いだから、本作はある意味で極めてわかりやすい作品に仕上がっている。それはそれで十分納得だが、その反面、何を主張しなかったのか？という社会問題提起の点で少し物足りない面も・・・。

2025(令和7)年3月6日記